

諸事伺之留

第七

内閣文庫			
函	冊	號	類
180	71	3182	和書
架			

七

内閣文庫	
番號	和 3182
冊數	71 ( 7 )
函號	180 128



諸事伺之留

第七

庫	文	閣	内
一八〇	三二八	和	
二二	七一	書	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 318
冊數	71
函號	180 128

正徳二辰年

緒事伺之旨

平賀



正徳二辰年

松姫君極上酒湯と為

右以後出程成相上より成り候

事成り候

三月廿九日

松平澄信

付札

二種ありて之を成り候

元

一 子綱

一 糸

一 昆布

一 糸

一 古摺代

一 糸

松娘若極は胞瘡出所為掛  
此後成右衛門智う右に  
依る事同の上

正月廿日

付札

付通の紙後進上

右馬松辰正月廿日  
但馬守殿より  
此の紙

私成婚礼今月十二日  
お綱中へ  
此の紙

松平右衛門智承

守之丞

一 婿礼 右 袢 巾 以 後 出 礼 之

作 守 以 良

袢 上

御 小 袖 十

身 礼

此 處 之 禮 亦 上 也

目 氏 右 系 乃 左 婿 礼 右 袢 巾 出 礼 中 上 也 良  
御 小 袖 十 袢 上 仕 以 付 度 亦 右 之 無 袢 上

不 仕 出 之 也

正 月 也

招 年 肥 亦 也

南 部 信 所 也

家 之 妹

伯 母

招 年 肥 亦 也

右 婿 礼 当 月 十 二 日 右 袢 巾 中 也 也

志性也

一 信佛者泊母今交婚礼お調中以後  
為志礼志小神祇上の仕立

先達を信佛者も亦婚礼お調  
志礼中上の志小神祇上の祇上仕立  
志性也

身札

泊母に成れる婚期に志礼也

中上も不及也

一 信佛者立初めを在りる近平親類を同  
名代を婚礼に志礼の中上も不及也

志性也

志

志性也

南部信房書

在国定書

元

一 惣綱之由礼法度事近々親類を  
内之代々々々 作守り南都  
をさしきり出さるる事河原上

守り也

右之書付身札仕女白に白さ度ら上

招平加加る事

苗書居

娘若極今日伊呂陽より為

石川守候

公方極加賀守より二種下向出書居是

秋元祖馬守様より御願仕候

御書極御度申方より前々様より二種

一石川守守御候



竹娘若極茂涉使志以青一程

瑞春院極 嵩山院極

壽光院極 茂院極

市使志以青一程元以中並山自又

涉歌屋極方志三人極志茂志青一程元

卷之六極志志之茂志中志若極志志

右志同極志志涉志程茂志致涉願志

志至奧村涉錄志志茂院

公方極志時股頂戴仕比極加登志

函許志志程茂何志中志志比志

同比志志年

娘若極涉涉染志時志

公方極

市卷極志加登志志涉程茂院仕比

涉礼使志志出志志中極志志志

志狀載志志極志志志狀志志志志



瑞春院様 出石院様

竹原君様 二正殿公前光院様

第百一程迄迄の上り下り

△分札

吉中進石掃部頭お授書に

格状執前書中務大輔并

若桑平次中上も分札の紙

中紙に

□分札

所為極之在御座と分札を

一紙と月番に中紙に

●分札

但馬守に中紙に

右無分札調一二月の間に及ぶ

出石院様出石院様出石院様

右中殿上

水戸中納言殿

右中殿上

右中殿上

右中殿上

常憲院殿上

常憲院殿上

淨光院殿上

右中殿上

右中殿上

右中殿上

右中殿上

公方殿

御臺殿

瑞雲院殿上

二月六日

姫君授出所屬の身は

清女中授方加加方より、出程成りとの  
事下並に右出礼し、此時晚出程、此  
西元の如きに能く

清女中授方加加方より、出程成りとの  
上は松とて、此後、此後、此後、此後、  
為出程成り、此後、此後、此後、此後、

公方極 御意極を言て、被上りおま

若くは、此後、此後、

清女中授方より、此後、此後、此後、  
中、此後、此後、此後、此後、  
此後、此後、此後、此後、  
此後、此後、此後、此後、  
此後、此後、此後、此後、

公方極

御意極始ふ事此由月之此程先付後  
難斗事取らる重なる事同知事初  
使者の事此由一月之此上て此程先付後  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事

此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事  
此程先付の事此由此程先付の事

正月九日

△身札

宮初之使者此由一月之此程先

身札

此程先付の事此由此程先付の事

中札

紀伊守殿

一 付度者松於中御殿より中御殿に所  
由沖へるに長福殿を由目より中御殿に  
至るに長福殿より中御殿に由目より  
中御殿

中札

中札

一 右に長福殿より中御殿に由目より中御殿に書  
院より未詳書院に由目より中御殿に由  
中御殿

中札

中札

一 右に松出書院に由目より中御殿に由目より  
由目より中御殿に由目より長福殿に由目

出月變斗出まよう出院へ出ぬりて變斗出  
追付料理出—了也

付札

此無—了也

一 出月二角無吸物出—了也  
各松之紀浮由殿不—了也  
若年—了也

付札

付無—了也

一 右お所各松上—了也  
松平右衛門智松平左衛門  
中各松出給左衛門智左衛門  
贈—了也

付札



付無二の宛好也

一 後段の海澄段、こは波の左より後段  
お屏吸お出所二正角無納之書之  
出所之由一各振之記簿函致書之也  
納之書之也

付札

海澄段之上吸お出所及  
る為は納之書之由一この

之成也

記簿函致

去書又序去段出書之序居段之各振  
出所之書之波振記簿也

一 照部白木具初就簿卷之面あり  
納之書之各振之出所之由一

中之由也

行札

付無しの成り

一 能く申付由

一 井仔掃部頭及振替成り申上り

申入由

行札

茶毒有種元由申上り

一 出入申上りし申付る同額申上り及

茶毒有種元由申上り

行札

付無しの成り

一 入申上りし申付る同額申上り及

申上り由

行札

付無しの成り

一 出入申上りし申付る同額申上り及

文中入少由

行札

付通

紀伊國

本福殿出書一為後成事月又日各松  
亦伸名及波拓諸少在書云云等之度  
出生為後成尾張殿上各松之波

拓諸少在之無之波云云之在性也  
後一列紙之在在在月少在在在在  
新入之好也

右書付正月十日河内守殿上札付少在

本智出札中上少在彼上在

公方極上

御方力

時股又

御馬代 菱合百両

御金取上

白紙拾枚

右 無事同也

二月三日

加屋左殿

付札

此紙は支度也

瑞雲院様

甚良院様

松娘君様

竹姫君様

青光院様

右

此方へ換上紙申す迄及未動也

此用形比後法産生少者乃採造相是

中比松之仕入也

二月廿

加左左脛

付札

被上之不及也

加左裁中子造相

公方極

御刀 三把代令二十枚

御巻極

浮勝相經 一原兼良公手  
代令十枚

右之無子也

二月廿

加左左脛

付札

此無子之支度也

如中流之流

白浪之波

日如波

日如

日如

日如

日如

日如

楚系波

楚系波

三室波

高嶺波

川流波

岩倉波

如如波

日如波

日如

日如

日如

日如

右之無事月也

二月

行札

春井波

岩城波

三坂波

吉羽波

菊川波

加倉左帳

此處つゞきお禮の

以上と云

一 諸願人等よりお礼の御返りお礼の御返り

の御上り

札

お及御進の

一月次お仕へ成るべく御願の御上り

取合の御上りお礼の御上りお礼の御上り  
おはる

札

お及御進の

一 諸書新の御上りお礼の御上り

の御上り

札

お及御進の御上り

右ノ無き月也

二月七日

杉浦集人

元

一 御領之佐波を白戸後立所より裁  
中より長尺申一系お渡あり一細尺  
了り候

付札

此無き佐波也

一 後大坂船中板圍との仕立也

付札

板圍との仕立也

一 厚申中取申しを所進の人數河經

この仕立也

給人

印人

付札



後人三人

醫者

一人

舟札

付五

法士

比一人

舟札

付五

足渡

二人

舟札

足渡十人

付人数多し故船中一人在り無き程

舟中一人

舟札

船中一人人数減り舟中不

若し

一 送申出根今切ある間有る無き時

秋中成に志すはりし志同を始るの  
中進は

付札

志同を始るの

一 頃及中にお終成に志すはりし  
後進中上級中より

付札

不及後進

一 及中泊はるる中級中級子あつたの  
仕是

付札

志同を始るの

一 終進中上級中級子あつたの仕  
出—志同を始るの仕  
是

付札

付無くは波は

一 房中呈程持為持之平は

付札

此無くは波は

一 高利界及中上りし若くは若者

若くは

付札

不若くは

一 道中舟海上るお然りりは波をその

中上り起しと船者志と茶用目と向古

りりし志と船者志と藤原朝と平は

若くは死はりりは平は

付札

然りり不及は波をそのと船者志

藤原朝と平は死はりりは平は

若くは不及は病死はりり死難

陰法はのり垂れ

一 旅立のしるし垂れ居るの種をば

付札

六等と交斗するは

一 旅立所平生商人の種をば

此

付札

並つゝの形合

一 根及鼻の色抜を中よりお後

中

付札

髪法は付斗この髪の色抜

入中なるは

一 書札を中よりお後する

付札

空用

一 候在にお醫成に古に生れを打て候と

一 候上候

行札

不及手候

一 候在にお神火柱に成りて候

行札

金山付斗火柱出のり候

火箸付のり候

一 候在にお病氣に候と醫する薬用重病

に成り候と醫する候と

候

行札

障子の醫師に候と不及候

醫師に候候と

一 候在にお候と

候

付札

不若也

一 歎在不知死之哀其可憐也  
死骸の如くは也

付札

病死ゆり一の死は死骸の  
法法と云は也

右に無事同の上

二月十日

松浦源心

元

一 市領之人は場園を築つて  
是に付道中系お酒を造り  
ありて也

付札

付札

一 厚中一 旅泊く 系あく 後一 高はく 也  
この中一 也

付札

系あく 後一 高はく 也

一 厚中一 系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也

地系一 醫師 以 考 名 考 一 中 一 也

付札

系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也  
系あく 後一 高はく 也

同以

一 厚中一 系あく 後一 高はく 也

付札

不及を成す

一房川中園に赤園不自多に禮文を以て

お急ごの中より

付札

赤園を居たのよ歌合の

一室中と云ふ所を一中の人の教を成す

了ははるを成す

付札

別紙より成す

以上

二月十二日

南無阿彌陀佛

又

お頭

三人

内々人成す

付札



お頭一人

信人

六人

舟札

信人一人

醫師

一人

舟札

舟札

汽船

二人

舟札

舟札

足燈

舟十人

舟札

足燈十人

右に示す如き者お船の足燈十人  
舟十人

二月十二日

光

公方極上

御方刀

一腰

御馬代

芝倉手杖

御刀太極斎代金拵杖 一腰

右之無隠后出札之長上平一尺

左之無隠后出札

二月十二日

遠山和氣

出札

於無之支度也

新設隠后手紙の付るは

右の長手紙氣を奉りて

城難仕の候へば為代内用者様

に申上候仕度内用者様

望

二月十二日

遠山和家

瓦

公方極

御方

御時

御馬代

腰

三

菱合

札

汝無二のみ支を度

御卷極

浪子

拾枚

札

白浪女板の

右に無家智札

左河上

二月十一日

幸山浮城寺

荒

赤女津の浮城

浪子之坂

寺系坂

日辺坂

常盤井坂

日辺

三宅坂

日辺

高瀬坂

日辺

川邊坂

日辺

岩倉坂

日辺

赤坂代志方

浪子坂

春井坂

日辺

員坂坂

日辺

辰城坂

日辺

菊川坂

日辺

音羽坂

右に無事猪の甲は其の如し

二月十日

泰山浮録

付札

喜井

岩城

三坂

音洞

蘭川

浮録

付札

付無事のお猪の甲

足元

一市部新状頂戴は其の如し

付札

このお猪の甲

一 旅南旅万一人馬多入りて其を郡城に  
中を以て若く由りて其を無きのは代  
り事

付札

前々一毎の如く

一 大和國中見たりて其前々一毎の如く  
事好あり

付札

目次

一 自福寺末寺ありて其事守務  
此後此左先親より其如く一然も  
其後此法より其別々由りて其の仕  
事守務より其如く一守り付り也  
り事

付札

目次

一 公事申訴訟了等難仕候事不可也  
お伺の中付の法は重中付の法是又不可  
代へ申候死罪未の中申付の事なく無  
お申候事左ふと云う各候にお伺の法は  
之を法に法なり

付札

目以

一 宗部之申事申し候ふに誠法事不可也

申事家へ無て仕りなり

付札

申事誠事不及也

一 大和一國之申事無女子形也——の  
申事なり

付札

申事無しの法なり

一 於南於前々々無席ノ角毎事切也

一 中 成 一 子

付札

目録

一 多 札 前 へ 一 年 以 前 付 込 取 違  
中 以 前 無 一 年 付 込 取 違

付札

目録

右 通 年 同 上

辰 二 月 廿 七 日

中 坊 吉 兵 衛 門

紀伊 陸 津 城 附 近 同 上 年 同 上

紀伊 上 野 高 地 上 女 子 職 以 初 年 同 上

一 段 上 荒 井 田 園 上 女 子 職 以 初 年 同 上

一 段 判 證 上 出 産 者 一 年 同 上

一 段 中 段 上 女 子 職 以 初 年 同 上

一 段 上 段 上 女 子 職 以 初 年 同 上



考其判證出——並荒井之無お成  
比根之きの入るお成

付札

如し成亦る強きもお成お成  
お成お成福徳園お成お成  
判證お成お成徳事平屋張屋  
お成お成お成

右之無加お成お成お成お成

辰二月廿九日加お成お成

紀伊屋 津城附 市屋——お成お成

お成お成

三月十九日

紀伊中洲屋 津城附  
お成お成

紀伊よりお成お成お成 女子お成お成

福徳寺園前より荒井一古園所  
目録の如き毎城代に於判證  
出並出所は概に其後度出多の事  
中入の由

一 紀別、この事多語如き報り候も  
前より此の事進言候事未なる  
所を成る候に松江波度府在候  
事申入の由

右一紙身取合の事付たに無

福徳寺園前判證の事

尾刻  
報示圖  
目録招意  
法徳寺  
延徳園

尾波度家意  
招示之状以家意  
招示申務大備  
水陸集人心  
戸田宗女心

浮務國

石川道行

右之少福徳園之判證云我道國  
切之市之女お魚中之確氷之上信徳  
一画之空之しるも水姓集之正之判  
出中之台山村之集之集之集之判  
江戸よりお定之判之撰之判之判  
表の上

二月

松本浮三

多右浮智之出加増之判

張之上

公方極

御方

甚合極

時股之

御極

白浪甘枚

瑞雲院板下

白浪拾枚

出雲院板下

目次

松尾春板下

目次

竹尾春板下

目次

出雲院下

白浪拾枚

芳光院板下

目次

浪之枚

冬系

常盤井

日抄教元

日抄教元

去力  
全馬代  
第青一程

去力  
全馬代

去力  
限子教

去力  
限子教

一奥向之向之占務物之成出同之及

三室

高瀬

川邊

岩倉

加子

表渡

掃部頭

志中

執前守

中務之補

養年子多元

市例元

千代由緒の御事

織田徳信の御事

勅使 隠岐及出羽之郡に於て刻限  
御奉行の御事 今迄之御奉行の御事  
之波止之右に在る御奉行の御事 又波止  
之川に於て御奉行の御事 又波止  
之川に於て御奉行の御事 又波止

之御奉行の御事

二月朔日

行札

又御奉行の御事 又波止之御奉行の  
御事

又御奉行の御事

又御奉行の御事

又御奉行の御事

右付のしるしを  
成るに成るなり  
成るに成るなり  
中

右付のしるし

右付のしるし

元

右付のしるし

切付

右付のしるし

紫押掛

右付のしるし

右付のしるし

二月

元

右付のしるし

右付のしるし

右付のしるし

右付のしるし

右付のしるし

右付のしるし

右付のしるし

右付のしるし

御無二の五支を度は

色利又四序初

赤目見は 作付は長被下物

用急し是

公方極は

一 御方刀一腰

一 侍馬代甚金十両

一 侍少袖十

御基極は

一 古着 一袋

一 白浪十枚

右に通奉同公に上

色利又四序初

赤目見は

二月廿九日

分札



此松の葉は

色利又白く初

御月見の松 後付の松は中の方

後付の松は

一 白根の松

一 同日の松

高瀬松

孝懸井松

三宅松

高瀬松

川崎松

岩倉松

おかし松

善井松

岩城松

三坂松

おかし松

一 同日の松

菊川松

右通事河内守

二月廿九日

行札

此札乃在松野山

毛利又曰平徳忠

中津殿之書

紀伊殿

今度来山阿茶院人上紀伊殿と  
醫者も出合也醫者藤之成爲水合度  
後直之住山の成候と信之住山の、来  
唐波一山松、此波度山信之、入  
山好山

紀伊殿山の醫者阿茶院人上

出合之成法賜之次書之

成法

右書付其後殿上御上

三月

紀伊殿より同

紀伊より本名路に執事如く成福

出合前日家起り判監之成法書

尾張殿より無之の成法名は日成法書

尾張殿方取合日交尾張殿より

順之成法書は成法書より

山村喜之助に成法書より成法書

無用之由成法書は成法書より

出合前日無之成法書は成法書より

成法書は成法書より成法書より

無之成法書は成法書より成法書より

振るる中付の

付札

此書付く無くのり成り

辰三月七日加賀守殿より

初

御月見被上御月

此方分浪馬代

付殿又

松平五郎

付札

右無のり成り

此方分浪馬代

付殿三

松平頼母

付札

右無のり成り

花

一類毎

御目見立 御付席の成事同也

付札

是合次第の二の成事

一類毎

御目見立 御付席の成事

城はらさるる志麻呂の同姓中より一也

嘗てはらさるる

付札

中より一の成事

城の

松平定房の御付

平の御付

二月廿日

右の書付御付席の成事

一 在りし物に爲りし禮に傳ふ二種一は  
被上り仕り

付札

同し無しの被上り

一 年中お定まり被上り候も  
亦用事にお宛に上り候も  
此

付札

此通りの被上り

一 此朝御を方名代に傳ふ候もの

中

付札

此無しの被上り

右に無事候上

二月十日

運國公

松平肥前守長崎上表載り  
於願河面後の仕向

以上

今度松平肥前守松平忠智以後初  
出願上 治書院御國上長崎  
出見出表 別丹後守松平忠智  
出願上 治書院御國上長崎

松平忠智方表出願上  
治書院御國上長崎  
出見出表 別丹後守松平忠智  
出願上 治書院御國上長崎  
以上

二月十二日

松平丹後守

上村忠智

出願上申松

行札

前々の無事成成候に松平  
肥前守ら成候事下付候  
事候

國許参上札候事

御目見候

先

一 玉降下候以後為札候事成候事

この中候事候

御目見候

作付候事候

願候事

但右書付候事候以後候事候

左候事

作付候事候

候事候

御目見候

作付候事



二月

松平肥前守

付札

しんが部

系部高松平記序と對話多大津守と系部

具又松平丹後守と向談し向

是元

一私成長治は書初為身立初にお裁り

松平丹後守於所を後前と丹後守と

是と向談し終度も安否では成り事

付札

前々の無きこと波

一如前々今度系部と立寄松平記序と後

無き目下事り

付札

同日

一 系教の系裁は良先祖の守大の連守  
の内親光院の上より中より及の徳目以後  
初より裁の時より前よりより系裁は  
以来

札

日記

育

松平紀高

拙意は成るるを志し成るるは成る  
在りては在りて中より及の徳目  
御宮系裁は及るる好む以上

育

松平紀高

札

日記

御宮系裁は及るる好む以上  
一の系裁は

撰志願を武烈中山の先祖廟前より  
及下彼二日路程の十二里より  
若法事申す所は仕り名系府に  
子載六七百波道より松仕る皮  
望

二月十二日

尾張府

付札

同の無勝子次方系諸六七百  
一の五道園作

清徳の長政とお旦社同

尾張府

元

明後本百清徳尾張府詳見の節  
臨く無

公方極上檢査重出有は波被上且如元  
以後為古礼羽之旨は波也

城高之旨は往比ハ宜出之旨系教は好ハ

二月十九日

付札

此無之旨成也

御禮之旨被上且古礼之旨

紀澤殿

明後廿一日 御禮之旨

御出の旨由は移重出有は波

被上之旨又 御禮之旨は波の旨

古礼羽之旨也 城之旨は波の旨

於入之旨也

例

一 去年三月

御膳之長由山崎檢重一組毎由有  
一種之波紋上白

一 御膳之長由山崎檢重一組毎由有

波紋上白 城

亦如中極方より造るべきと云ふ

亦如中極方より造るべきと云ふ

一 右為亦如

井澤掃部殿

亦如中

乃部執事殿

亦如中極方より

造るべきと云ふ

亦如中

右之無以得る事也

亦如

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

明後十日 此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

此無二の成り

御小袖

又

御鳥

一疋

以上

藤堂主水

高陳

行札

御鳥一疋以上

嬭子主水

御鳥見之云浦系子病氣

舟以袋代古札平上代向

以上完

嬭子主水

御鳥見中上代古札平上代向

御鳥見中上代古札平上代向

御鳥見中上代古札平上代向

御鳥見中上代古札平上代向

三月十九日

右卷海部

付札

以名代出札中上石友

招平肥培

前々奉勅之長被上每子  
之由先

公方極

御方馬代張百枚

一 蠟燭八十目掛子換

御卷極

一 張子沙換枚

竹姫君換

一 編綿換毫

瑞雲院極

一 右同以



付札

右通三卷之上

古方金馬代

一蠟燭四百換

古方一種

付札

井澤掃部頭

掃部頭板古古方一種

流下中八為年初

義左衛門

付札

此處之札

古方金馬代

蠟燭四百換

古方中板方

古方板方

古方板方

右目以

市方金馬代  
蠟燭三百換

一 市方金馬代

若市至申松方

市 剛 元

寺社市子元

市養志心申元

一 市方子代張子板元

市小性元

一 市方子代張子板元

市小細元

一 市方子代張子板元

市菊子元

大日守元

町市子元

市菊子元

一 浪子三枚元

古化子三枚元

古香子三枚元

古百人三枚元

古月分元

古猪元

古卷元

古花元

一 右目以

古月元

古数元

一 浪子一枚元

古数元

古数元

一 金子三枚元

古玄元

中之口内人

以上

付札

右之通之口内人

白浪之枚

冬系

常盤井

三室

日之枚元

高瀬

川瀬

岩倉

うよ

日之枚

表渡又人

右之通之口内人

紀伊郡より同

叡者院極二十回御志法法の事  
又月東叡山の事  
右法法事申紀伊郡西御志法より  
法如の事は彼に直法にの事に入  
存也

付札

南月法法事申中へ成

宣三年

常徳院極二回御志法法の事

一頁の事は彼に直法にの事に入

一頁の事は彼に直法にの事に入

叡者院極七回御志法法の事  
法如の事は彼に直法にの事に入  
為代御由元より御志法にの事は

報

一 出法了の初日

一 出法事申中一夜

一 了却出経法了の旨

一月月八日

常憲院極

御承請多程の旨右

度々代紙尾列よりさき承取の旨

し若お動

一 出法了の初日 為月防持姫

出城に在府家迄の旨の旨

中

一 出法了の旨

常憲院極に極旨重一組在府使志

旨被取上

一 了却出経法了の旨 為月防持姫

出城に在府使志の旨上

一 东叡山下

御系治事此山当日

還御為同涉控經

御城山在府使志之山之上

一 志香真白張百枚之波初上

一 志法事一在府使志之日

御城山在府使志之山之上

一 志精進揚行在府使志之山之上

志波初上

一 志法事一初上之山及尾列之山

以後

志在中

牧種浦尾書及

松平浮聲書及

志同揚傳書及

志香真白書及

養年奉祀  
出別札

右ノ通傳札ニテ奉  
御

一 出傳子ノ御所ノ後尾列ノ  
御奉

右ノ可ノ通傳札ニテ奉  
御

一 奉獻山ノ

御奉詣ノ後尾列ノ御奉  
御

右ノ通傳札ニテ奉  
御

一 出傳進ノ為揚山ノ後尾列ノ御奉  
御

以  
後

出  
奉  
御

御奉詣後

出傳進後

出傳進後

出傳進後

出傳進後



右ノ花札ニ載ルモノ

右ノ通シ未動由申上

辰月廿七日付札ニ魚巻後

上

表付札

松平之御書

松平之馬

新用之御書

公方檄

此方刀腰

黄令子板

時勝三

御書檄

白浪子板

右ノ通シ未動由申上

白浪三枚

日抄三枚

日抄三枚

右三冊の目録

卷一

常盤井

三宅

高瀬

川

岩倉

加

喜井

岩城

三坂

喜洞

菊川

松平之御書

日氏之馬新同乡部之礼

之附

公方極ん

綿百把

御屋極ん

編酒十卷

右之無二の之禮

以上

辰三月廿七日之禮及之之禮

一之礼よりノ女中ノ務御等

元禄十巳二月廿八日法行或部之礼日氏

右系美力中上ノ日辛十月廿日松平頼母

之礼日氏出羽中上ノ時也

御屋極ノ右系後出羽中上ノ御法行日氏

務御日記

水戸殿少石川 臣俊幸治也  
治之無我古跡地為打  
其好石治之

付札

古贈子攻守一の成比

古用中紙上お内意同

以上

古用中為同 古用中紙上お内意同  
古用中紙上お内意同  
古用中紙上お内意同  
古用中紙上お内意同  
古用中紙上お内意同  
古用中紙上お内意同

冒首

松平陸奥守

例書

日氏上總公代古用中祿上お

是

天和元為之月

在右

浪古水次 一

出水碗 二

長蛇 一箱

天和二戌之月

在右

古鞍 三口

古鏡 三懸

古蛇 一箱

同之亥之月

在右

蠟燭 二百挺

長蛇 一箱

貞享元子之月

在右

右月以

貞享二世之月

在右

右目形

日之真之育

浪出石次 一

浪出冰碗 二

浪出碗蓋 二

本蛇 一系

日之知育

罐箱之可授

左目

左目

本蛇

元祿元辰育

左目

浪出冰次 一

浪出石目 二

浪出石蓋 二

本蛇 一系

日之真育

此書は服之年々お見申上り

日光志重清也、と傳相動也

左府

蠟燭又百換

長蛇 一匹

日三年宵

此言日光之法中以之保加也  
依此言系被上物不仕也  
此言

日未七月

左府

蠟燭又百換

長蛇 一匹

日又申宵

左府

右日

日六為宵

左府

右日

元禄七戌宵

左府

浪水碗一

浪水碗二

浪水碗三

青地 一箱

右之無不司之被上仕所元禄七年  
以後由由地之在之良之蠟燭在國  
之良之浪之水及良之良之良之良  
之良之良之良之良之良之良之良之良

青

松平隆子書

例書

目氏上總女日先由重隆出之傳

お勤小内去用申被上物

元禄二年六月

此書は元禄年中に

蠟燭 一箱  
青地 一箱



元禄元年平幕府仕所斗為世臣也  
年之始在江戶以天右衛門守  
古之傳世勳功斗斗也江戶之法  
中

日之平二月

世臣日光之法中

古之深加加斗斗後法古之法上  
仕所以世臣古之法中

右一通古法以上

四月七日

松平陸奥守

辰四月九日加加斗斗上

新法斗斗之法也斗斗之法也  
斗斗之法也斗斗之法也斗斗之法也  
斗斗之法也斗斗之法也斗斗之法也  
斗斗之法也斗斗之法也斗斗之法也

以上

二月廿七日

方馬言菊次

札

家お翠郎へ無印人お摺  
いひやう

別書

海邊迄の馬換松平古代馬換

此如翠郎へ成形合の馬換の由定  
し無印人先の馬換の由先  
古代法成形人お摺六人先  
由の法成形人先

二月七日

方馬言菊次  
水谷宗茂

出月廿七日

方馬言菊次

肥浦在秋分之日系橋之季也  
與定之卯二人増之入(百)則(百)也

右日加加(字)後(古)原

元

秋上物

未(長)之(松)

態障泥 二掛

市(古)刀(浪)馬(代)

未(長)之(水)

市(古)刀(浪)馬(代)

右(無)後(亦)秋(上)仕(山)上

舟(札)

同(無)後(亦)上(山)松(下)波(山)

月(十)音

未(長)之(松)

右(十)音(加)加(字)後(古)原

元

一之能山

御中社法如致法胎不淨法不この印  
可く毎字以寺防中無き此部又本年目  
以 作付の先例 多法之性下子本年  
以 作付由中平又本年之成損中  
以 此及先例之無淨法料之内之  
作付の根を列の上

辰

二月

久能

徳音院

寺社古事記

寺社古事記より

寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より  
寺社古事記より

分札

同通修理料  
中付山等と表等  
濱府におき

元

一之能山等以社信并兼仕福直等  
装束等前より又本年目  
修理料

作付山等本年より  
及破壊り方  
作付山松等

寺社奉行より札

修成去々本形出山  
本修り初元迄  
上付前より  
内等  
修理料  
濱山奉行

分札

月一五修程料一月二〇〇〇

中付

一素指

一又條加書

一三法加書

一簿簿

一判費

一珠教

一中啓

右字以乃書來

一素指

一又條加書

一簿簿

一珠教

一 甲袋

右社僧侶等八人前

一 厨子衣

一 帷子架掛

一 珠教

右社僧侶等八人前

一 袴衣

一 刺灸

一 凡打馬帽子

一 束廣

右社僧侶等八人前

一 素襖袴

一 素袴馬帽子

一末廣

右身福直正最年七ノ人ノ和

卯

正月

之能

陸吉院

身社古事以和

右身無之書付ハ公之陸吉院ハ辰巳月十日  
上ハ

以上ノ元

新成向後端年重陽歳言為古後成  
此附股被上仕及事好ハ何店ニ公事成  
アタリハ事好ハ以上

正月十日

松平之書

身札

同ノ無ノ之被上ハ



今度東廟山法法事申法書真々成前  
法法事申之書も又万石以上之書法書  
真被上は事比却塔子辰お月出公家  
之上被上は下度も之書張又被上  
仕度も物以上

正月十日

金持宗重

付札

法書真々張又被上之書以上

辰月十日法書度より付札

是

今度

巖方院極三十二回法事申法事之書  
法書真被上仕度も物以上  
常憲院極

法揚院極出法事之初申法書真

上社并増上寺に被上仕所の松山寺  
より持て来りし以上

四月

海老名

付札

伊香真つ之被上

辰巳月十二日を以て候より付札

今度

嚴者院極淨法事と云はれ親戚  
仕りし系ぬはれ日又伊香真つ之  
より持て来りし以上

四月十二日

松平之部

付札

氣色候系ゆり系洋一の  
被上伊香真つ之より持て来りし以上

一書の新泉寺も次男と云は伊香真つ之より持て来りし以上

書付添出ス

辰月十日音多付添出ス 付札

古法の中上種火くあまう月

是元

一上姓く日裁日限古法採前日日裁の

中成く事

付札

寅子月三日動ゆ流つて水形合の

一岩坊く古法連の人数形合前くく無  
仕ゆる

付札

くく形合の

一火のくく古法場く火のくく向多次  
火のくく出の左より上姓を意中云儀事  
火のくく出のくく出のくく出の

御佛殿前より

御成出つゝ角以地を三人をこのまき

谷中本々筋ハ八日

御佛殿十日

御佛殿前之慈院とて人しるもの

子如也

付札

くまの部也

一 御佛殿

御成出つゝ角以地を三人をこのまき

付札

高子月と勤の流とを承合也

一 前々勤方承合程又中合也

付札

くまの部也

一 上姓お法をまきり日お月を流ハ也との

伏乞

拜札

宣十月廿九日

近屋左門

横山教馬

松平之若末

月

長門公若末

屋張殿

今夜日光卯近

宮中御所

御所

別

一 宣文

宮中御所

御所

御座候事

御座候事

一延宝七年未文月日光卯通

宮中御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

延宝七未又月日光卯延

宮中御所内法皇御院及左記列下

勤之尔云云在日九月酉延

宮中御所内法皇御院及左記列下

着年平多光延卯札云云御所中

行札

日光卯卯延

宮中御所内法皇御院及左記列下

不及卯

水戸後下

今度日光卯延

宮中御所内法皇御院及左記列下

勤之尔云云在日九月酉延

宮中御所内

行札

日光寺 卯延交書麻小符

古傳志之及上之不及也

右加賀院より以舟札に傳書

辰巳月十日

水戸後より卯

延宝七年十月未月

卯延交書麻小符源美屋より

辰巳月十日

卯延交書麻小符

卯延交書麻小符源美屋より

辰巳月十日

卯延交書麻小符源美屋より

辰巳月十日

山人氏より



今度於東殿山

佛法子之長少十人組

御堂中由お勤中由河書元

一前々

藏書院極佛法子之長少

御位牌

御前中由右佛法子之際少十人組中由

御人元組既之入元指席二成之仕

佛法子之長少中由お勤中由佛法子之長少

御前中由佛法子

常憲院極佛法子之長少佛法子之長少

御前中由お勤中由佛法子

御位牌中由お勤中由佛法子不復佛法子

お勤中由佛法子

付札

御前中由佛法子

一 法律事務中少半人方組頭組申之由  
 少屋中陳述 作付少室坊お屋中  
 此等も是等状法切を在り付組申少く  
 とな成ふ所程に在り申中此等間敷多き所  
 室坊に 作付少りり所松を致し  
 事

付札

取立事務中少半社を以て凡に

一の如後

一 御堂にお勤り組頭申す由多き事  
 室坊又少屋に在り是等状を無松  
 作付少りり所松を致し

付札

取立事務中

一 教方院極法法より御堂にお勤り  
 取組頭を御堂申す由多き事御堂申す由

本稿之用仕下也

常憲院極出法より一語も平中も

本稿之用仕下付度も如何の仕下

とも同し

付札

改組既も慶平目本稿平中

慶平目本稿

一 御意者お動の当り改組既平中も此札

仕下事

付札

己為此無也

一 出法事平中改組既各組中出稿も

とすく朝夕出稿理より此平中

付札

一の為前々も

一 改組既も此出稿の内は港為持也

無りし事

札

前々々々々々々々

送

月

長岡部

右に無りし事

尾張殿

藏書院抄三十二回  
尾張殿動方  
料事好

二十回

一万部  
お勤



しん

一 法法事半半

公方極上松法重一組の事  
秋上

札

付度も法松重一組の事

日限の事

一 万部法経法部守代系

公義

公義

即代系お守代尾張屋より  
及名友

札

法願

一 目日 市城  
公方上

付札

前々々無二の成成

一 出法子お原はる聖日と成る

城

付札

張子かや成

一 出精を揚はる有あ程の成り成

城

付札

付成し出有りの成り成

出成り成

以上

四月十八日

今度

藏有院様三十二回成り成

尾張殿簾中より東へ殿の代系を  
申す度と致す所は香真と申すは  
一長一短と申す致す所

二十又同志と申すは法部  
あな代系と申すは香真と申すは

香真と申す

公義と申す

御名代におは尾張殿より代系を

比付簾中より右へ香真と申すは  
御名代におは殿簾中より八月八日  
代系と申すは香真と申すは  
簾中より代系を香真と申すは  
又致す致す所

付札

八月八日御名代一の香真と申すは  
香真と申すは八月九日



中堂よりお取付

右へ送付する旨お取付

四月十八日

水戸殿より

付度

蔵書院極二十回送付は法事申す

水戸殿より勤方へ成り又同送付申す

無二のとお勤方日且又申す君殿より

送付無勤方の申す申す申す申す

取入らるる

行札

宣十月法法より

申す成り

例

寶永九年申三月廿五日

藏方院極小文回市志法信子於上野

出極小文

一 出法事申開闢守為月法持姫

市城上使志法信子

付札

前々々々々々

一 出法事申出持姫守一守及守被

系法信

付札

出及も付無々々

一 出法事申守守為月法持姫

常憲院極小松出守一組以海志法信

被上野

付札

付及も出持姫守一守及守被

皇太后御前  
御奉

一 万部佛经法苑等书为同法苑  
御城上御奉

行札

前之御前

一 又月八日右

御佛殿

常憲院御奉  
御奉

皇太后御前

行札

前之御前

一 佛经等法苑等书  
御城上

御城上

行札

前之御前

一 佛经等法苑等书  
御城上

古香真白浪に接収し海志を以て被

取上り

付札

又月九日古香真浪に接収

中堂にこの如し

一 市法事市法新羽之日

常憲院極に法精進揚々市音以

使志を以て上り

付札

付度も市音つて秋に日浪の如し

市音の合この如し

一 市法事市法新羽之日古香真浪に接収

代系に接収し

一 市法事市法新羽之日古香真浪に接収

中堂に白浪に接収し海志を以て被取上り

付度

叢有院極法了り付度其若く及  
此書真張紙枚紙後より好む其又同  
法忘りて白張紙枚紙後より好む  
常憲院極法了りて同法忘りて  
白張紙枚紙後より好む其若く及  
又枚紙後より好む付度其若く及  
其松紙入り好む

付札

法書真張紙枚紙のり好む  
其外に枚紙宮中法了り  
其紙のり好む

右に通付札のり好む其若く及  
其同册紙のり好む 其紙のり好む

此書真張紙のり好む其若く及

所及及古殿

古殿  
佐服部十郎

尚且月法事申定致し并

年好に不及比古事と真に及上

不及比

是

殿方院極中お及及是也

尾張殿

女院所所費御守

榊葉 池田 新女院 大権后古方

尾張殿并公儀申より勤し成りて

波の古事真に御上りて波の成

尾張殿

榊葉 池田と御上りて波の成

道法天皇系統の系図

神代卷

行札

神代卷

神代卷の系図

後醍醐天皇の系図

系図

水戸殿の系図

女院法皇の系図

公方極の系図

御城の系図

神代卷

神代卷

神代卷

神代卷の系図

神代卷の系図

神代卷の系図

神代卷

神代卷の系図

奉旨正局分札入以好也

行札

出傳志之正局出以好也

禁裏 出傳志之正局出以好也

了成之松平紀傳古出傳志

了成也

至永六年十月廿二日

新院出傳志之正局出以好也

城之羽目 出傳志之正局出以好也

出傳志之正局出以好也

出傳志

禁裏 出傳志之正局出以好也

出傳志之正局出以好也

出傳志之正局出以好也

出傳志之正局出以好也



禁裏

仙洞一種元博

奏元

院系元述京部（此處有重字）

使高（此處有重字）

水戶殿

女院法（此處有重字）

公方極為古精進揚後水戶殿（此處有重字）

古青（此處有重字）

水戶殿

付札

不及（此處有重字）

室永六年十月

新院法（此處有重字）

古精進揚（此處有重字）

尾張殿（此處有重字）

宝永六年十二月

新院御前崩御云

禁裏 法衣方上段尾長殿建志云

法持姫云云同云右侍志云兼古書裏

白浪方枚云波被上云云申陰云

禁裏 池内上京殿云云云云志云

一程元云波被上云

一右云云云云申云云以侍志

禁裏 法衣方法持姫云云同云

古香裏白浪方枚右侍志云兼波

被上云

紀伊守殿云

如院出不去上云自薨去云云紀伊西殿

西許云

公方掾 御為掾法持姫同云

如所の如被以直名爲し此記列の中  
を後幸同也

行札

け無この如成也

室永六世三月

新院直前御之直尾張及西許  
より爲同許抄姫使名を此記列の中

間部執事及名平等名以上  
の中入書状に直尾張及西許  
在府之者を此記列の中

一 御意極侍抄姫の月當直南寺居  
右西許より直尾張及西許より  
直尾張及西許より

行札

右ノ通ニシテ成ル

辰巳月廿四日加賀屋より手札以右同順次

所城海ノ邊ニ

上野志信子ノ云

後居彦彦平  
浪在彦彦多 如礼寺新田成中上右吉村  
関久若事門

中山出彦子

古書真浪之教之上事也

後居彦彦平

是乃四月二十日之如礼寺新田成中上右吉村

椽別無之居塚之上為右臨之如礼

仕也

古書真浪之上事也

浪在彦彦多

是乃右同順次

同日

関久若事門

是亦在因以

右之無子部法法子之皮之洋礼  
亦出以付皮之礼亦形如法  
礼之亦出以松之了後以亦同  
以上

同部音

付礼

考按之無礼之亦出以

是

一 以限帳之其門合之形味法也  
中以短尺亦德出帳之法之中度  
亦有短尺亦在亦礼之 亦付以松也  
亦出以

付礼

考按之亦出以

一 此の如く記載の事実又と目名を以て  
此の如く実文く此の如く除名斗と前  
お徳未の去後此松もおん中此名目名  
も亦名実徳の中此の事

付札

付無つ物

一 二男三男の次等一誰子と斗只今を  
徳未の去後此徳未の中此の二男三男

此の如く徳未の中此の事

付札

目名

一 何れも明細書を以て此の如く帳  
前々奥向く此の中此の事一誰仕り付  
此の如くお徳中此の如く此の如く  
この如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く

付札

表紙右の字組取らう奥の向用  
字より出中性取 以書付お同  
ゆき表向 無明細書つぎ各電  
中より右お同の松の波の

一 正の出入重の筆を各産り取珍矢仕の  
流し今度之重のも多し出仕の右  
入重の筆は 作付の松は仕度をおの

以上

付札

先を延び之新書より中後を以る  
つお附の

七月

右七月の日は後後らふん

辰巳月高旨の後所より付札の古云

上紙

松平右衛門督妻

伊香真秋上付

松平右衛門督の古云

中交

一白紙

三枚

二口より申月

嚴者院松二十回忌念ふ伊法事申付  
松平右衛門督妻如より伊香真秋上付  
申付申付存付以上

付札

付札

伊香真秋の古云以上

松平右衛門督の古云

守備之古云



別紙

元

一 招平安癘等及内室

嚴有院極亦同法志之時心婚  
礼在之少左侍番真茂亦同其上

之中比之付

常憲院極法事中之法番真

之中比之付

一 右邊智妻女候

嚴有院極法時代之形面候也  
法事中之法番真茂之候之不

之中比

常憲院極市代之右邊智方

婚礼茂亦同比

常憲院極法事中之候同比

之中比

右に述べてある如くして法華真  
經上の松本東の智恵をみるに  
一の松本を新中上下の道

二月廿一日

松本東の智恵  
七〇〇〇〇〇〇

上と法

法華真經上同

一の五之松上名中

松本日

中文

光

今度松

松本東の法華真經上  
一のはらへるは

二月廿一日

松本日

上座紙

古書真紙上刷書

松平日向寺

中文

常憲院松平日向寺

紙上仕向寺

日向寺

松平日向寺

上座紙

古書真紙上刷書

松平日向寺

中文

古書真紙上刷書

古書真紙上刷書

古書真紙上刷書

日向寺

松平日向寺

付札

糸女等古番真入り古番上

上庄紙

古番真於中堂紙上例書

本多孫三郎

申文

又元

白紙

三枚

右々

嚴方院様二十日申上忘り古番真

とて於東敵山中堂紙上例書

本多孫三郎

付札

一の為前々無比

辰巳月廿四日付札古番紙上例書

一 七帖に右衛門左府より一在り付如礼  
二 之より由出動定まらぬお同様礼も仕  
三 するに有る長徳より系如仕度由お取  
四 長徳より系如松と辰巳月廿二日  
五 右後房より付礼と有る云

来月於上様法事奉りて云云番真

被上り後月序並り出度有る於中堂被上  
仕度奉取以上

四月十八日

柳系誠中書

於中堂被上り松と四月廿二日お松  
河内後房より長徳及に法事奉

以上

新度前より出本坊に番番真御中

此後も同様にして中蔵部中蔵上  
納付申付書付之に事同様に

二月十八日

元

本年二月於上陸法事一に於て  
被上之候同様並成法に於て  
致之仕度事同様に

二月七日

生駒之度

本蔵源部

又信之部

中蔵上之候上之候と二月十八日  
申付申付書付之に事同様に

元

二月

嚴方院極三十二回清忘法事一付  
竹腰山城寺法書真紙上仕下紙  
波度比直古之公家於其後山山城寺  
當時尾刻之紙在以上

胃

別書

室永元年申又月

嚴方院極寺之回古忘法事一付  
竹腰故在以上波度尾刻之紙在以上  
古香真紙上仕下

付札

竹腰山城寺法書真紙上仕下  
古成紙

右付札之紙在以上古成紙  
印極附之紙在以上

今度

嚴有院極之十二箇志法事一  
水陸法事等法如法古番真志  
彼之也度法事如法古番真志  
記刻上系以付是又得志志心  
被上仕如極之為彼度之好以  
別教入之好以

室永六世三月

常憲院極法一月志法事一  
水陸法事等法如法古番真志  
如法仕如安度常口法記刻  
得志志心古番真志被上仕  
負教古白法之教志被上仕

分札



水陸法華寺法華堂  
系此松之成由安座堂  
是又法華堂之松之  
成由

加茂本門法華寺中法華堂成由

招平之成由

加茂本門

招平之成由

右本門法華寺中法華堂成由  
招平之成由  
加茂本門法華寺中法華堂成由  
招平之成由  
加茂本門法華寺中法華堂成由  
招平之成由  
加茂本門法華寺中法華堂成由  
招平之成由  
加茂本門法華寺中法華堂成由  
招平之成由

被上白紙を紙の紙上

胃

松平三斗次

付札

糸海に松の葉を添はし香煎

はかまに不及の

辰巳月廿五日の夜後より付札を急ぎて

湯法子中同治を上姓と見出し煩

松平三斗次

上姓

湯法子中見出し煩

胃廿六日

肥前

胃廿七日

淡路

胃廿八日

三斗

胃廿九日

浮豆

胃卅日

肥前

日 日 日 日 日  
六 必 皆 平 二

兑

淡 肥 浮 之 淡  
淡 前 豆 斗 淡

大葉子  
之水

古本具屋桶至大  
十斤

桶大  
孫 物

古海  
浮 錄

日  
云 序

余危危  
九十九

生元屋  
正 成

古急降  
新在唐

古海屋  
小在唐

日  
治在唐

日  
志即

日  
理之集

古端屋  
久在唐

古研屋  
治在唐

古定急屋  
八之助

古滴屋  
又之助

虎屋  
藏印

右に老上姓法清より付法札を奉る  
前々後法清より

小畑町酒老交死  
権之儀

古酒屋  
酒之儀

右に老上姓法清より付法札を奉る

右に法清より付法札を奉る以上

正月廿日  
武井公八郎

山田少之儀  
浮屋新之儀  
市川喜左衛門

法札

前々より法札を奉る  
右に法清より付法札を奉る

糸糸不反也

上姓法師子身糸如紙

是

一白浪抄枚

後名経度助

一日抄枚

糸糸口序序

一日抄枚

糸糸口序序

一日抄枚

糸糸口序序  
三序序序

一日抄枚

上柳糸糸序

一日抄枚

糸糸口序序

一日抄枚

橋本糸糸序

右七人 室永元申 糸糸口序序

糸糸口序序

糸糸口序序

糸糸口序序  
糸糸口序序  
糸糸口序序

付札

前々々無二の波也

付札

去々々年

常憲院極少法事云々

古香真之叔云々如札也

梅田宗儀

之瑞彦助

山田元徳七

浮城元徳七

若尾元徳七

戦法云々

二并云々

法雅

加賀云々

右八人室永元申年

或指又回法云々如札也

古香真之叔云々

付札

前々々無礼のついでに  
伊香真浪を教へる上は  
波々

赤松屋長山

青之信將古波色  
破田老三郎

右有人家永元申年

此後又回古志く一長如礼はれは別々無  
如礼を教へ

付札

前々々無のついでに

去々々年宣々年  
赤松屋長山  
赤松真浪を教へる上は  
波々

此の人々去々々年  
赤松真浪を教へる上は

赤松屋長山  
赤松真浪を教へる上は  
赤松真浪を教へる上は



宗平 弘礼 弘光 弘光 弘光  
即日見申付日方 弘光  
道全 弘礼 弘光 弘光

右六人 吳服師 弘光 弘礼 弘光 弘光 弘光  
左六人

外札

右六人 弘光 弘光 弘光 弘光 弘光 弘光  
上札 弘光 弘光 弘光

右六人 弘光 弘光 弘光 弘光 弘光 弘光  
弘礼 弘光 弘光 弘光 弘光 弘光  
弘光 弘光 弘光 弘光 弘光 弘光

弘光 弘光 弘光

弘光 弘光 弘光

弘光 弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

弘光 弘光

古香墨卷  
肥後

日向  
澁川系系巻

古晒屋  
清原系系巻

古蠟燭屋  
三井道舎

右九人付度如礼を奉り  
三月  
浮高系系巻

内左系系巻  
上南系系巻  
池波系系巻

外礼  
右九人如礼を奉り

山系系巻

上建降礼お勤り支配し奉



後方原野

後方原野

後方原野

後方原野

後方原野

後方原野

後方原野

後方原野

本阿保光道

本阿保光道

本阿保光道

本阿保光道

本阿保光道

本阿保光道

本阿保光道

本阿保光道

下付札  
後後...  
前...  
若...

行...

本...

温...

前...

行...

市...

角...

松...

岡...

安...

吉...

吉...

尾...

尾...

正...

堀...

石順水

高橋屋敷

赤羽屋敷

白田屋敷

小碓源助

浮床屋敷

浮床屋敷

岡心屋敷

小坂市

平田屋敷

高尾屋敷

入江友甫

舟札

付分不承舟札の巻

元

如礼之出也

之禮廉潔公節  
曰之在也  
曰之在也  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節

之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節  
之禮廉潔公節

象原又次郎

膝部左次

尾田平次郎

古海内次

榎川左次郎

土橋左次郎

奥村平次郎

膝部左次郎

比叟教馬

高良左次郎

井岡左次郎

昭田宗次

高橋左次郎

杉村河内

吉川左次郎

中務浮助

一口浮線

浮為宗家

辻 志比

石井宗湖

宗良志在書

堰年楊成

龜尾長隆

別當云市印

廣合傳書

書林公家

長谷川右衛門

家城彦八

お月連之助

辻 左之衛門

浮務因承

坂田三傳

常憲院極品信之



此二人前より古流子  
此礼より出仕

此二人娘より出仕

右へ通し如礼より出仕

辰  
二月

付礼

右へ通し不残より出仕  
己より出仕

大庭師一舟

安室宗久

高橋宗久

小浪左京

守隨宗彦

山田宗加

玉屋宗彦

永村惣右衛門

白屋三郎

神谷宗右衛門

植村宗右衛門

古抄巻

古藏人

古藏法師

夜元夜元

古藏法師

本林方歌

古藏法師

秋山如六

古工

岩井如六

古藏法師

荒木市吉如六

古藏法師

松本如六

古藏法師

名藏法師

古藏法師

尾如六

古藏法師

堀澤如六

古卷

古卷

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

古抄

宗院

宗原平云

人数以拾人

今度出法了り付

御堂忍礼寺記

宗院

宗原平云

宗院

右有人一若今度初

御堂忍礼寺記

宗院

宗原平云

宗院

宗院

右一人一若今度初

御堂忍礼寺記

一 御系信しし長於此世其不勤為之高  
 懐來し終品今道  
 御目見は世少頃其上り此世其為  
 百より方半禱り  
 御目見は世少頃其上り此世其為  
 此世其為  
 御目見は世少頃其上り此世其為  
 此世其為

以上一光

御願ふに御方甚と御國の好む御殿  
 御心奉り候以上

又月三日

杉浦集人

行札

下野お渡り

元

一 御意平市中部状出候事  
多札建の中成事

付札

御意平市中部状の事

前々無事建

一 主生らお志願日城門弁ら仕双方  
お事申す候事

仕り

付札

前々無事建

一 宿次出候文部校社出候事  
幸好ら

付札

一 おお候

一 城邊家或り書付御府へ

中江集

付札

前々々々々々々々々々

一 壬生城引渡日限一月廿五日未極由  
双方より申す事の後々々々々申す事  
子誠の六月廿二日初元迄は是は  
右二三日之内出用は後日松仕迄  
存心集

付札

々々々々々々

々

々々々々

後日松仕迄  
松仕迄

々

於轉刻也而師職之者其忘服之故也

古くは平家と源との争ひに別宅仕に在りし人  
尚人仰上座中より其を南家と申す也此の儀  
平家と源との争ひに古来より其の別宅仕に在りし人  
建武の中家と申す也其の儀代新儀也  
其動中の古法に在りし也

一 御名代に在りし人其の儀代新儀也其の儀  
必出入其儀代新儀也其の儀代新儀也其の儀  
其在代新儀也其の儀代新儀也

御名代に在りし人其の儀代新儀也其の儀  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也  
其在代新儀也其の儀代新儀也其の儀代新儀也





時辰文

御意極上

編編十卷

松平喜多子

公方極上

赤方金馬代

時辰文

御意極上

編編文巻

右之無紙上り極上の紙

辰巳月廿二日尾張殿お是の三序極上をてり付

尾張殿お是の河内殿御座

辰巳月廿二日

尾張殿より書後殿に此書付

元

一 松平八三郎日盛子進候

御目見の由 作付名は 作中より

尾張殿より里侍礼ふ如くこの由候

由

先年松平出雲守の由

石出の由

上段阿部宗隆の由

作中の由

上段為吉礼瑞竜院後泰之院後

光 城且又吉中 方深科肥後殿

河井河内守及若年寄礼吉則候

使在の由

礼

御目見の由

一 御目見の由八三郎日盛子進より

公方様御目見の由候旨候上

御書極上編綱接是是是是是是是是是是是是  
波央

出雲寺始而

御目見之良日一人也

嚴者院極上階寺勿馬代時殿  
之嚴院極上編綱十是秋上中

行札

御書之抄附

一在之良尾接殿目及每抄本持佛也

出雲寺一人也 城山松之波度也

抄上

出雲寺始而

御目見之良瑞毫院及泰公院及

目及波央 城山

行札

尾接殿目道之波央抄上

お屏の抄律の由重なる内蔵一人

芝 城松の由波の

一 御目見仕の上尾法殿同及の井海  
掃部殿及法年中方弓部職前書後  
本年中務大輔及の由我若年寄所せ  
八三郎と長子進斗の職は松一の由  
波の由

由重なる始の

御目見お屏の上瑞竜院及宗光院及  
同日及の由年中方肥後守及の由我  
河内守及若年寄所元と若年寄斗  
お輔の

付札

由重なる由成の

一 御目見仕の上八三郎と長子進海近日  
の由掃部殿及の由馬代時成の

由氣中子執之而後中務大輔殿に  
去り馬代付殿之元持系養年分元  
八三郎と称子進するに傳志との去り馬代  
正長と稱の正長と稱の

由重子始る

御目見仕り以後酒井雅樂氏殿に  
去り馬代付殿に由氣中子河内を後  
去り馬代付殿之元由重子持系

養年分元元と目人より正長と稱  
去り馬代正長と稱

行札

付無一の正長と稱の但進おし  
八三郎殿に付無長と稱の進殿にお  
由重子と稱

右道正長と稱の正長と稱

正長と稱

元

一 食口百廿五

付来品拾五

付人数百廿五人

山林又左衛門

八丈

内

男子百廿五人

男一百廿五人

女子百廿五人

女一百廿五人

右之

作村

返納仕以積り但辰上月より八月まで  
日数百廿九日と申候也

一 食口百拾五

付来品拾五

付人数百廿五人

山林又左衛門

三根村

内

男子百拾五人

男一百廿五人

女子百拾五人

女一百廿五人

右々々々よりをぬりぬるに大橋  
お果り守池村々若々村境を堰切らる  
之根村々若々池村々々無法当りお  
此の守かせりおり不仕り方列る國窮  
仕りり一守吏食之成るなり  
三月廿日教示百六日一守出教一守  
返納之積り也

今令七百拾由余

右々々信之成去邦秋州色遠吏食  
之々百姓困窮仕り守去々お同出報米  
百石令百又拾由也汝信也 守守守  
尚云此々お續り左下色又去々々  
時々々而階續仕り守生成り之又下之而  
大風吹湖勢激吹上下守妻能之以指  
其成倍換仕り守何々々守守根水  
腐り守守吏食之法り守守守守守



帆及下中名臨没人即人臣をよそ  
孫出中比後之申食未之珍味は如  
書向之無志之佳は右之出救未食不  
之申並比之申之流お後は右之友とて  
存比方致之無也 作付之申之根  
仕度之申之好也

辰  
胃

小林又右衛門

右之通志成友書付之申一吟味は如  
書向之無志之佳は右之友とて  
作付比之申之流お後は右之友比織物志  
返羽仕比成志之佳は右之無也  
作付之申之根村之成も七年の如  
百姓困窮仕比之申之救之申て申之返羽  
之成も志之申之根と申之成も  
困窮之申之救之申て申之救之申て

出産の望

辰

酉

子

卯

元

一 食此百子孫有奈

計此百子孫有奈

計人数百子孫有奈

但日教孝日分辰月より  
八月迄五分

円

四百子孫八人  
四百子孫八人

男一百人  
女一百人  
計二百人

右を去邦三月廿八日直列三尾湯地農社  
祭事奉り中山より焼出湯中より炭砂灰

計又左書り支配可

直列

三尾湯地農社

除積り百姓難成仕り申す存心善くお願  
上清の代に召進ませ御見念ふ為波知お達  
言はせ仕出さるるを御し申合方々之上  
着きこころ杯塔の如くお濟仕り御天は又  
塔を——と存し砂灰除積り申す意  
一切言はせ仕及凡ゆる申すは言書面——と  
百姓たに召進ませ申す御し仕り成り  
お救言はせ仕り申す御し御し御し御し

存心以上

辰

四月

少林各處門

右に通出成友書付る出は御し御し御し  
の宛を存心以上

辰

行札

御し御し御し御し

右有無月書又月書の河内を居ら上ん

此領とく内方甚之序に宛好はるお度  
一の中はくも月くは以上

六月九日

松浦集人

付札

礎にまはり出—この中の中  
組の子をく波—用つて中の中

辰六月九日

右有無月札調ゆる大和を居ら上ん

板倉右近

と上

御方

一腰

御儀子と字お

三腰  
白

御馬

一疋

以上

此無つ者支度以上

辰宮ノ上

月番ノ世之私之殿より外札

一考合元出港より去る市ノ無お果の寺  
左ノ無取出の寺より去るの寺林ノ寺

不取計の寺より出たりの寺の寺の寺計  
二浦肥後寺組去る寺の寺の寺の寺  
此頃波病死の寺より去るの寺の寺の寺  
笹井村菩提院の寺の寺の寺の寺の寺  
平三郎の寺の寺の寺の寺の寺の寺の寺  
酒井の寺の寺の寺の寺の寺の寺の寺  
寺の寺の寺の寺の寺の寺の寺の寺  
寺の寺の寺の寺の寺の寺の寺の寺

平之序立又とて志し成るるは其の願  
く世に言くは服を解くは為仕度候  
事好し肥後守未記刻より不其内  
秋月守府中上白紙

二月十日

阿部遠守

付札

取し無しの紙に裁

酒井國勝

之森公高

右以印右来門実又古百市之懸渡守言  
病死は印付死骸市之懸初印不武列  
笹井村善提不宗源守の明後十七日  
志中印後之印右来門候も死骸  
附右宗源守の紙焼香仕度事好  
及法上果奈志姓の出入言くは服

手紙の宛先を記す中、後を好む等

二月十日

西井因幡

付札

取不取叶比等千段の半段は

公方極ハ

御殿子

葛粉

一袋

一袋

御殿極ハ

葛粉

一袋

右に去波浮縁を古用中、為月法極は

前々御上は、由法極は、新法極は、

公方極は、古殿子、斗、秋上は、

御殿極は、只今、近河、成、秋上、不、法、極

向、後、上、浮、縁、を、古、上、無、秋、上、は、

取、不、取、叶、比、等、千、段、の、半、段、は、

以上

六月十日

内子等

身札

浮城寺にて無事の事なり  
御為極に成る事なり

右六月十七日徳島藩より

御上あつた

辛巳

正月

御方馬代

御儀初

二月三日

御盛巻

端午迄候

又月

御帷子

八朔

九月

御方馬代



至陽法師成

九月

御少禮

威言出祝成

十月

御少禮

右しんそとさるるりし無我上はひん

十月十日

月夜寺前

新成去板法師代に 淨寺の付去法師縁寺

浪波地敷上はひん次牙形合山別紙書付  
し無我住山新成も淨縁寺同松三年申  
月無我上は夜寺好山不し成も新成縁  
未法無不中ひん付法無次牙形合山  
我上はひんお慈くも山住山りし寺前  
この寺同山願知し内、我上はひんお慈くも  
寺前住し寺前地大板あり月不お慈  
去板に無我山縁寺味は張るの寺同山

月並被上おし種・成先幸何りる由之候  
成之り下以上

正月十日

内府者之御書

付札

月次被上お浮縁者付之無の  
成之り下以上成を承る之由候  
之を承之り候御書

右正月十日但馬守殿より

右被浮縁者月並被上おし元

元日

御書力馬代 奉成

正月十日

御書之 成御書初

正月

公方極に

子公極に

一公お

御書極に

子嗣

二月

三月

四月

五月

六月

公方極ハ

葛粉

御厨子

御厨極ハ

葛粉

七月

八月

九月

十月

十月

一茶

塩鴨

饅頭

芳雄極

御帷子當年一匹後

津海流

御方馬代ハ

古少神重陽一古後

桑一茶

冷松茸

正月

陰節

正月

公方極に

御少禮

歳言の古礼

新年

陰節

御互極に

日

陰節

右の魚の由の古礼の事

正月十日

月夜の事

月夜の上の事

正月

鴨

二月

菖蒲

正月

粘漬鮓

六月

清扇文

七月

推草

九月

鑑奥

十月

葛粉

冬中

奥席朝  
卷掛

右へ通只今迄机上仕下以上

二月十日

内倉去之書

奥平之帳美

今度始ふ左下台掛帳より重出有

左下台光

二程一高

机上

蠟燭台台

右左下台台仕下台為掛札以注意事云云

机上仕下台

亡文奥所台始ふ台帳より重出有

山形に在る一書無題上は

付札

此無題上は

一 端午重陽歳言一書後成在府一書無  
不取留被上は

付札

目録

一 在府一書月次被上は

不取留被上は

付札

目録

一 八羽為古後成当地一書今亦事  
此方目録被上は

付札

目録

一 入巻を同法抄起在亦一書並一書

徳意の波紋上り

阿部海軍少将の交際を記す  
別年同次二頁上り不並録一  
を余が持帰るに付少致上り此  
由之生

年札

日記

一 為年札に於て徳意の波紋上り

阿部海軍少将の交際を記す

年札

日記

一 年札に於て徳意の波紋上り  
阿部海軍少将の交際を記す  
別年同次二頁上り不並録一  
を余が持帰るに付少致上り此  
由之生

阿部海軍少将の交際を記す  
別年同次二頁上り不並録一  
を余が持帰るに付少致上り此  
由之生

此書は上りの書はこれなり

付札

此書は河内守の書に上り

一月二日物古儀初立府より無事書成上

の付しり

付札

この書は上り

一日二日如例年々事年々自ら為札書出

この中より事年

付札

この書は上り

一月二日物古儀初立府より無事書成上

の付しり

付札

此書は二月廿二日の書



糸勤なるを月以て元

公方極ハ

一 御方分金馬代

一 綿百把

被上

付札

付通ハのハさハ上ハ

御方極ハ

一 浪子ハ板

被上

付札

口以

一 浪子ハ三枚二枚を板ハ元

由申ハ方ハ

付札

付無ハのハ終ハ以

亡父ハ及ハ母ハを糸勤ハ由ハ札ハ申ハ上ハ由ハ終ハ以

と申ハ由ハ終ハ以

一 糸動し一節も於糸部松平記序書及に載  
の事同法持姫に云

付札

付無しの波に

右の事一節も同法持姫に云  
以上

育

荒

一 在りて波に無しの事於糸部松平  
記序書及に載の事同法持姫に云

付札

付無しの波に

一 糸部連に守日之白院に守日親之祖  
位牌ありしに之を子持番は及に有る事  
ありしに云

行札

勝子宛 行札

一 今度初冬、義出産の事、  
順分境、及、仕度、在、好、子、  
但、子、出、行、料、之、目、を、毎、日、付、在、宛、也、

行札

勝子宛 行札

以上

酒井雅樂次

今度初冬、在、宛、之、  
行札、之、目、を、毎、日、付、在、宛、也、

手、宛、也、

元

一 在、宛、之、  
行札、之、目、を、毎、日、付、在、宛、也、

沙、境、

二十、年、

行、寄、

二、種、

御札

一冊

分札

二種一冊半の巻上り

一冊動の巻上り

御書

御島代紙 百枚

綿百把

分札

巻上の巻上り

御巻紙

白紙

十枚

分札

巻上の巻上り

右の巻上りと同姓勅解由紙上は私紙  
付無紙上は公紙同紙

七巻系右近所監松平隠岐守柳系

或形五博も白浪抄抄上は白浪抄も  
抄抄抄抄上のはり

二月

河井雅重

白浪抄

其系及

常盤井及  
之室及

日三枚元

高瀬及  
川崎及  
岩倉及  
おうの及

日三枚元

赤巻及人

付札

常盤井及

元

一 奉勅之旨、所由院被上、おとす、只、  
此、法、師、の、初、め、の、御、成、立、の、由、  
若、る、後、に、所、由、院、就、上、お、は、な、さ、  
す、ゆ、り、

付札

三用

一 奉勅之時、所由院、奉勅、御成、立、の、由、

一 奉勅、御成、立、の、由、

付札

付通

一 奉勅、御成、立、の、由、所、由、院、奉、勅、  
若、る、後、に、所、由、院、

付札

三用

右ノ無事同公上

六日

酒井雅樂頭

酒井雅樂頭以来辛酉月以日光条落  
仕度由同々奉

付札

胎子没牙の事候也

又元

一 法事未及所若事の事々々無誓詞之由  
此中由事動り松の仕度ノ事同也

付札

先松之無事候也

一 誓詞之候由以次事也 淨分事の松  
事候由且又組申由切未由持持方事々々  
此中若事由出没料由事候々々由禮々々候

是又幸致也

付札

今之好部也

一組中門履贈子次守月由由之合是親之也  
仕上心也

付札

先様之無贈奉送守之好部也

二月廿五日

江原与右衛門

正徳元年甲申正月廿八日市正徳月出札

中上心良親上御左之也

御左之

一腰

御帷子草

又

御馬代合子敷

一疋

中山与右衛門

付札



右之無日市

御刀  
二文字玉造  
代金指子校打紙

一腰

中山海前守建和

右之無日市

舟札

先振之無日市

後水戸殿私進目出札  
先振之無日市  
中上之松寺  
以上

六月十日

中山月記

右之無日市

荒

一 後々 伊殿 赤手 赤手 赤手 赤手  
一の仕 此 式

牛札

赤手 赤手 赤手 赤手 赤手  
赤手 赤手 赤手 赤手 赤手  
赤手 赤手 赤手 赤手 赤手  
赤手 赤手 赤手 赤手 赤手  
赤手 赤手 赤手 赤手 赤手

一日 赤手 赤手

赤手 赤手 赤手 赤手 赤手  
赤手 赤手 赤手 赤手 赤手

内曲 福 並 芝 城の仕 此 式

赤手 赤手 赤手 赤手 赤手

赤手 赤手 赤手 赤手 赤手  
赤手 赤手 赤手 赤手 赤手

芝 城の仕 此 式

城の仕 此 式

右の段 赤手 赤手

赤手 赤手

赤手 赤手 赤手 赤手

付札

前々出た書は我々の時々の  
次第に

常憲院様 桂昌院様 御佛前へ

御控紙別紙奉被上仕立紙紙  
廿九日迄申一紙立申如く仕立申  
以上

七月十日

牧野周防守

不及正上方書信為より申達

松平中納言

系勤侍札之旨

姫君様へ正上方おき外は申性気束調  
御おの仕立同

松平肥後守系勤侍札お海山

杉原君様 行形君様より 宗上様  
宗上様元宗小納言元宗も御物置に御別紙  
の無葉の御合紙に御紙の御紙も今も御紙  
宗上様御紙中上御紙  
杉原君様より 宗上様御紙の御紙も  
肥後守目松は度々御紙の御紙も御紙中上  
の御紙の御紙の御紙の御紙の御紙  
杉原下徳守

元

杉原君様

編編

十出

斗札

又宗上様御紙

行形君様

右目録

付札

目次

左方馬代浪文板元

中山性元

左方馬代浪文板元

中山性元

右方無松平肥後守系勅付札上  
勅由由承合上

加賀守及北陸守下総守及水戸守  
次高田守及上野守  
被上御事一負敷ハ一減ハ  
勘解由及一准一  
作中

下総守祖父刑部左衛門法相  
勅由由

勢難若換上上者一或日記九吟味  
仕以文端年重陽歲暮言一防後成  
二種一房元上上初一幸年一有度初  
在亦初上上上上上上上上上上上上  
相重中上帳面也上守中上上上上上  
不中上上先年一房爰引燒一上上上上  
日記一房上上上上上上上上上上上  
帳面也波燒失失上上上上上上上上

お教り申す

子代姫若換上上端年重陽歳暮言一  
上上上上上上上上上上上上上上上  
上上上上上上上上上上上上上上上  
お教り申す

七月十二日

松平下総守重定  
平姓新次郎

元

歳言

昆布

一箱

一子朝

一箱

古持代

一丈

古糸動

一編酒

十卷

古在忘

一子朝

一箱

剛年

子月晦日

一水脩

一箱

右々

元徳始君禎日招平肥後守より先年  
是乃上由生

歳暮年

一二種子丈

右

松姫君様上 松平澄清より 謹言上

比由

端午

一二種子何気

歳暮年

一二種子丈

右

竹姫君様上 澄清より 謹言上

歳暮年

一二種子何

子丈

年中あり

一 志在可相



右

右 諸君 様 へ 渡 した 事 へ 先 年 中 迄  
迄 上 下 由

由 希 勤 之 旨

一 晒 布

十 疋

右 用 中 諸 君 様 へ

一 苧 芻

一 箱

先 年 中 諸 君 様 へ

一 鮮 鯛

一 折

右

先 年 中 諸 君 様 へ 渡 した 事 へ 先 年 中 迄  
先 年 中 諸 君 様 へ 渡 した 事 へ 先 年 中 迄

先 年 中 諸 君 様 へ

右 諸 君 様 へ 渡 した 事 へ 先 年 中 迄

先 年 中 迄

招 来 中 諸 君 様 へ

先 年 中 迄

隠居家録一 序札の上の巻左へ通  
被ふのは伏

家録

細川家録

公方様

美作守方一腰 徳前四左成  
代金十枚

時後又十

白浪五枚

序札

時通三枚

御書様

編誦白印二十卷

白浪五枚

序札

目次

隱居

細川誠中

公方楸上

御方一腰

御帷子草廿

御馬代草廿

御七服指一腰草廿

合渡草一幅

唐經山寺

佛照法光禪師字

右合渡

圓縁書

一幅

持別家禪寺同書

圓縁書

身札

同以

御巻極上

古今和歌集 一部代不紙

西園寺在右長実在左之字

外札

目録

右在左同上

七月十一日

細川之程氏

家督之侍礼中上之長孫御光

細川之程氏

白浪十枚

君之京原

常盤井原

三宅原

高瀬原

川原

若倉原

目録極上

日三枚え

一

右へ通二のにお徳の

あかしの皮

喜井皮

岩城皮

三坂皮

吉羽皮

菊川皮

私お智くは礼中よのさいたくお来

く老をるま

市目見く皮を紙の石若思ひの

一の物松を紙の

御上お伺ひ七月廿日玉出別産まそなを無

お徳を札調くを産ま皮とよ

御上の深馬代  
け紙文

長尾を皮

御寄手浪馬代  
時股二

坂崎右衛門

右同

本村半平

右三人お包没

御寄手浪馬代  
時股二

岩間三治

右同

序山典松

七尾系多喜

右此人お包没

以上

七月十日

細川三頼氏

付札

右内お包没

右付札の無き後より此迄

牧禮之受子

御方一腰

古付腰六

御馬代共全十番一丈

御卷極上

白浪拾枚

御札

右之無二の御札也

御女中子

浪子御方

御札

女中子一巻御札也

右之今之受子御札也

右之上中目録一巻御札也

御札

牧禮之受子

身札之無名位及子位云

牧野之字家系云

可智出札云

白浪之枚

日抄枚云

日抄枚云

常盤井  
三心  
高瀬

川治  
岩倉  
加子  
喜井  
三坂  
音洞  
菊川



右一冊に上お綴り

松平浮造の同

巻

公方極上

時服六

御方合馬代

御方極上

白紙十枚

付札

同二冊に上お綴り

目氏宗見先幸平河越守右河内守  
公 御方極上の上の品を右に無  
中の付度も右に宗見先幸平河越守  
同二冊に上

七月十八日

松平海軍

元

清城志女中の方へ

白浪之叔

日抄叔元

寺原及

常盤井及

三宅及

高瀬及

日抄叔元

望

舟札

同く無二のりお給ひ

七月十八日

川橋及

岩倉及

お加子及

赤松渡又人

身札之無名後及下之古名

西智出札之古名上

南多字替之補

即古名

合馬代

時替六

即古名極

紗綾十色

千朝一色

瑞雲院極

紗綾五色

千朝一色

芸仙院極

同以

招那君極

目録

竹原君様

目録

古部屋

紗綾之巻

千羽石巻

おきりあきり

目録

左京出方

目録

夢光院様

目録

張之枚

豊原

常盤井

三宅

日少教元

日少教元

高瀬 川橋 岩倉 加々 喜井 三坂 喜洞

菊川

右長七月十日百多屋及上調上元

市吉力浪馬代

市雅子市吉の御女

右新智一市礼中上り市吉の御女  
市吉の御女

七月十日

市浦市吉

手札

此無二の事なす

一 御意極くはなすにあたりては、無形念の  
中、安んじたまふとおありし、其の御意申  
候おはし、その事、いふるは、又、平直敷、此  
書付つて申す候

辰七月十一日、其後及らば

一 並、形念、いふ

御意極くはなすにあたりては、無形念の  
中、安んじたまふとおありし、其の御意申  
候おはし、その事、いふるは、又、平直敷、此  
書付つて申す候

此無二の事なす  
如申し候おはし

御意極くはなすにあたりては、無形念の  
中、安んじたまふとおありし、其の御意申  
候おはし、その事、いふるは、又、平直敷、此  
書付つて申す候

御意

一 腰

御馬 代葉合子板

一丈

御帷子 陸軍用

三

右 御上

御蓋 楯上

白浪

又板

舟札

右 御上

御如中 上

白浪 三枚

白浪 三枚

お	岩	川	高	三	常	寺
か	倉	崎	瀬	宝	盤	系
子	後	後	後	後	井	後
後						

白浪三折元

陸奥使元人

斗札

右一斗二斗三斗

朱倉丹塔寺遺物

御刀色紙

一腰

代倉十三枚

右袖上仕度古物

斗札

此無二斗三斗

右月去斗札調一辰七月亦有斗札

元

同姓敵中古物高地古物中斗札三斗  
敵中斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗斗  
為持中斗斗



御先代始造りて仕仕の付在造りて  
一本長刀減中より不若の成り仕仕  
前々之無對造持造り十文字長刀為持  
中後より不若の成り

七月十九日

細川之親

行札

對造持造り之成り為持成り  
不及于成り造り筋長刀為持

了り申上

七月十九日奉度成り行札之無持成り

奉度成り

一 系之板 造成り造り道具先創り無成り  
の仕成り事

行札

例之無りの成り

一 京大坂覺院前へ一筆に付て

付札

右目以

一 半平へ申す日教お勤りしりしの上  
以て奉

付札

右目以

右へ申す為端先様へ一筆お勤りの事

奉り候以上

七月廿一日

高橋権右  
山崎孫七郎

七月廿一日 右へ申す為付札用之紙及上へ

御筆は難し

右へ無紙上用意の仕り候以上

七月廿一日

京極甲斐守

付札

此無二の事なる事

右書付の事後お取らぬ事なる事

云

渡邊海守の嫡子孫河も始る

御目見の 御守の事時殿の事方浪馬代

御上仕の浮殿後殿の事無事なる事

中へ出内意を伺ふ事

七月十九日

水姓對馬守

付札

此無二の事なる事

右二日事後取らぬ事

松平加賀守

松平在野の智と娘婿婿お調の事取らぬ事

例書

口元

公方極に

時股

大納言極に

白浪

御簾中極に

緋紗

三斗

又十枚

二十斗

御簾中極に

緋紗

二十斗

又九極に

緋紗

二十斗

八重姫君極に

口元

右に無しのと成り

白浪十枚

目又枚元

目又枚

目三枚

目三枚元

冬系

常盤井

多う七

上み子

冬少強

法う

二浦井

冬如子

いこ性

右の無二のよお指し

法去り合馬元

二種

法去り合馬元

松平右系交換

松平浮聲と交換

弓部職名

御方合馬代

若菜平次

一程出稽代

古川元

以上

出稽極方若菜平次

宝永六年

將軍 室中

出稽極方若菜平次

出稽極方若菜平次

出稽極方若菜平次

出稽極方若菜平次

一 宝永六年十月

をよおはらひ

一 尚書

松姫若松所屬の庄屋様

所姫若松様

之御返答極より御文はかかるとも

おはらひ

加賀守様二條之御云殿の御礼お察しの  
以後御上にお成り松にお成り平の  
何れに成るに成るに成るに成るに成るに  
この庄屋様と先年松平右衛門督方の  
加賀守様御礼の御返答御上にお書付成るに  
各庄お成り松中御礼

右御礼お潤中  
進上お成り先年付成るに成るに

澄波の義は日事このまゝに生れ  
世にまゝにお月の中を遊ばす

七月十九日

右の書付は其後書致す  
此中在る趣は此の  
如し

上手札

松平加賀守様

二條大納言殿より名女御様お慰め

松平加賀守

公方様

時殿

市巻様

編納言

瑞雲院様

日二十

出立院様



目録

竹野素模ハ

目録

赤野ハ

目十ハ

おんハ

目録

左ハ

目録

右ハ

左ハ

一ハ

左ハ  
二ハ

左ハ  
三ハ

掃ハ

志ハ

執ハ

中ハ

若ハ

一様子丈元

張拾枚

日又枚元

市洲流

寺原

常盤井

三宅

高敷

川清

岩倉

かよ

喜井

岩城

之坂

高羽

菊川

日又枚元

右へ通じ橋の跡は

右へ通じ橋の跡は  
但馬守殿の跡は成り出後

先副一無成子不ハ成古加お寢太書切  
徳七月廿四日奉後及出

但加知方方ハ出副書々ハ日奉後及出

送

一松姫君様ハ進了おハ成向出

付後記

水廻り

中宮様婚相出礼ハ付右ハ無可ハ

云上ハ

辰七月廿四日奉後及出

細川之程以同書

云

一長湯湯船取ハ奉

船二艘内

- 一 艘ハ櫓敷子三挺
- 一 艘ハ目二子挺

右諸島船長前々々 作付今迄毎年

正月朔日より翌年十二月晦日迄二月

三日迄同姓職中より方長職並正月節

松平直後氏船入替中より

但し直後氏船入正月朔日より九月晦日

まで正月より三月迄並年中より

付札

前々々無二の如故也

一 此代安不肥後國天子より方長職並方長

者并前々々事

一 者氏 一人

一 侍 一人

一 醫師 一人

一 目付及侍 一人

一 足燈 廿二人

一弓

又法

一陟地

十又換

一船或艘

一艘の櫓数字を換之

一艘六日二十換之

二艘八換之と云

右に無長を云ふ

作付今以同姓

裁申さるるに云裁並出用之云云

友中後出用形は松は仕事也

付札

裁申さるるに云裁並

一考後國日同之松伊代友不云事云若

云裁申事

右出代友不若人入以云以以同形

中亦出代友不云事裁申事云形

云若云云云裁出用形は松云云

今以同姓裁申云云 作付出動云也

中山長治生作

分札

前々々々々々

一 涉領之人之事

小栗之庫子等

四人

小栗等

涉領之年八歳

尚辰之十九歳

涉領之年六歳

元禄七年閏月廿

十九歳迄症瘕未

果中

同八

涉領之年四歳

尚辰之十九歳

同六十

涉領之年二歳

尚辰之十九歳

同小

右之和元年七月音日姓執事



改訂判證右支店園前より出立書  
判證右支店振込波度より好む区画  
杉並区

七月

付札

集人正然に急ぐ事

元

- 一 来り廿九日同姓日向子婚札お察中  
中今月控更出札中上は出被上  
お  
あつた仕  
一 御意振込被上お  
一 同姓日向子出札  
右へ通す同

七月廿九日

松平権左

付札



此札は長時殿宛の御紙

御書様は六紙上ありて

七月廿八日右身札を後殿より申上

是

一 来ん者有私様松平日向方へ御礼お慰  
申上候中今御書様此札申上りて御紙上  
ありては御書様同紙に

七月廿八日

松平信孝

身札

此札は長時殿宛の御紙

御紙

七月廿八日右身札を後殿より申上

是

八朝御書様同日姓御紙申上りて御紙上候

この書は在りて隠居以後に成りたる

河津道一

七月廿九日

細川之親政

付札

古き刀剣上へ所及び出来年等

は成りし事なきに似たり

右の七月廿九日奉書殿より

大書院在保法郎

元書院

集人書子

二子又百之原

宮崎新七郎

右新七郎今日臨月は 作付の事

八朝の古き刀剣上へ為仕り

月次、後、光 城子仕り

以上

七月廿九日

大書院郎

古園子居

大原法橋寺祖

宮内省御用

小箱に法書の上は松の木の御書

多及芝 城

七月晦日

右書付法橋寺に法書が御書成法橋

糸勤云

松平下法書

荒

松平君様

編編

十卷

付札

編編文書に法書の上

汗胎君様

右目

付札

目

去方馬代法之教元

去方性元

去方馬代法之教元

去方綱元

付札

去方白浪之教 去例  
一種 去例 去方家元

去方白浪之教元 去例 去方性元

去方白浪之教元 去例 去方綱元

右 急松平肥後守之系勅元 去札

中 上 山内守勅元 由 山内守勅元

付札

松平下総守より幕府へ

付札の無きもの納付

元

一 市方金馬代

晒布三十疋

付札

市方金馬代

井原掃部頭

一 晒布三十疋

一種

市方中換

間取御前中換

本多中務右衛門

一 市方金馬代  
晒布三十疋

付札

市方金馬代

晒布三十疋

元

一  
市方金馬代  
晒布十疋 元

養年券中換

付札

市方金馬代  
沙綾女巻 元

市側元換

一  
市方  
金馬代 元

付札

市方  
浪馬代女巻 元

一  
市方  
浪馬代女巻 元

寺社市券中換

一  
市方  
浪馬代女巻 元

市券券中換

一  
市方  
浪馬代女巻 元

市券券中換

一 古之刀  
浪馬代之殺 元

古之刀  
浪馬代之殺

一 古之刀  
浪馬代之殺 元

古之刀  
浪馬代之殺

一 古之刀  
浪馬代之殺 元

古之刀  
浪馬代之殺

分札  
古之刀  
浪馬代之殺 元

古之刀  
浪馬代之殺

分札  
同日

古之刀  
浪馬代之殺

一 古之刀  
浪馬代之殺 元

古之刀  
浪馬代之殺

一 浪沙救元

浪沙救元

一 浪沙救元

浪沙救元

一 浪沙救元

浪沙救元

一 倉敷百廿元

倉敷之組以元

一 倉敷百廿元

古教書を  
倉敷之組以元

右を中総寺主勤之由札申上り其の故  
を申上り申付申上り

松平の信通を以て  
松平惣奉行

中園附村方支配之成り書付

深澤公方書付

元

一 先年申上り申付申上り支配地は 深澤公方  
深澤公方より成り申上り申付申上り  
申上り成り申上り申付申上り  
申上り申上り申上り申上り申上り  
申上り申上り申上り申上り申上り



付札

此札の旨は

一 先年十田等處に支配地を以ての時多し  
近邊十七ヶ村より汲水に由りて此處に  
より運り申中此處に汲水も其前より重  
十七ヶ村汲水も以て此處に汲水も其  
水と大勝出入用し其前より汲水も其  
は其後を其前より

付札

此札の旨は

一 十田等村を以て御代友より其前より  
此處に汲水も其前より汲水も其前より  
其前より汲水も其前より汲水も其前より  
其前より汲水も其前より汲水も其前より  
其前より汲水も其前より汲水も其前より  
其前より汲水も其前より汲水も其前より

付札

多札に成松平石見守之丞  
大隅守の方より送る文書未だ  
是より未だ送るのめおはる

一科人罪科中付の煙草に成るより死罪  
流罪と成り遊放より煙草科も不及月  
中付より向後河方村方より送る文書  
中付より向後河方村方より送る文書未だ

付札

付通のめはる

一前より成松平府より成り九人梁杉以  
二間葉書に樹屋法之住所及流罪の由  
牢会中付の文書に成り流罪は極  
は成るなり右由入用終裁しこの中松平  
成り方より送る文書未だ  
入札に中付より向後河方村方より送る文書未だ

付札

此度波風破れを以て見事な御書  
入札中付をよむるに似たり

送

青巻

津浦文庫



